

ティーチング・ポートフォリオ
県立広島大学教員としての活動の省察

作成日 2017年9月21日更新

吉川ひろみ

目次

1. はじめに
2. 教育の理念
3. 教育の責任
 - 1) 作業療法学科カリキュラムにおける担当科目の位置づけ
 - 2) 担当授業一覧
 - 3) 担当授業の概要
 - ①作業療法専門科目
 - ②実習関連科目
 - ③研究指導
 - ④他学科合同授業
 - ⑤その他
 - 4) 作業療法士への教育活動
 - 5) 研究会活動
 - 6) 社会に向けた教育活動
4. 教育の方法
 - 1) プレイバックシアター
 - 2) 作業レンズと COPM
 - 3) AMPS, ESI, OTIPM
5. 教育の成果
 - 1) プレイバックシアター
 - 2) 作業レンズと COPM
 - 3) AMPS, ESI, OTIPM
 - 4) 卒業論文と修士論文
6. 改善：変化プロセス
 - 1) ポートフォリオ作成を通しての教育方法の変化：プレイバックシアターの積極的導入
 - 2) 作業療法士教育から社会における作業レンズの普及へ
 - 3) 作業療法の発展への貢献
7. 目標
 - 1) 短期目標
 - 2) 長期目標
8. おわりに

添付資料

1. 以前のティーチング・ポートフォリオ
2. プレイバックシアター劇団しましまの活動
3. 担当授業シラバス
4. 作成したテキスト一覧
5. プレイバックシアターに関する報告
6. 指導した卒業論文一覧
7. 指導した修士論文一覧
8. 依頼された講演等一覧
9. 所属する研究会等一覧
10. 授業評価
11. その他

1. はじめに

このティーチング・ポートフォリオ作成の目的は、県立広島大学（就任時は広島県立保健福祉短期大学）で22年目を迎える教員としての現在の自己省察である。このポートフォリオを読んだ同僚や学生との意見交換を期待して作成する。

2014年9月にワークショップでティーチング・ポートフォリオを作成し、12月に更新した（添付資料1）。その時の短期目標、①ポートフォリオ作成を通しての大学教員としての質の改善、②COPM*とAMPS**を使った作業療法の普及と推進、③プレイバックシアターの技能向上は、ほぼ達成できた。しかし、短期目標の達成が、作業に焦点を当てた実践の普及、自律的判断と行動につながる教育という長期目標に近づいているかどうか疑問である。さらに、2014年12月に作成したアカデミック・ポートフォリオでは、作業レンズの普及と主体性と自律性の促進を根幹としており、今回のティーチング・ポートフォリオにおいても、ここに焦点を当てることとする。

また、過去3年間に作業療法士教員5名中3名が退官し、2015年から副学部長になり、2016年には大学再編検討委員になり、教員としてのポジションも作業療法教育を超えるものとなった。

*Canadian Occupational Performance Measure（カナダ作業遂行測定）

**Assessment of Motor and Process Skills（運動とプロセス技能評価）

2. 教育の理念

作業レンズを持ち、作業の可能化の技能を備えた作業療法士を育てたいという理念は、継続して持ち続けている。人は作業をすることで成長し、より素晴らしい人になっていくと考えを広く一般に普及したい。今日何をして何をしないか（Doing）が、自分がどんな人になるか（Being）を決定するという作業療法の考えを、すべての人がもつことにより、保健医療、福祉、教育など多くの問題を解決する糸口を見出すことができると考えている。興味のある作業に主体的に取り組むことで病気が回復し健康が増進するような関わりをするのが、作業療法士である。作業療法士の専門的視点とは作業レンズで世界を見ることである。年齢や性別、心身機能によって判断するのではなく、作業レンズで見ると、何がどのように行われているかに着目することができる。作業療法士独自の専門技能とは、したいことやする必要のあることをできるようにする（作業の可能化）技能である。作業の可能化には環境が大きく影響するし、人と作業と環境との適合を吟味していく必要がある。その上で「その気になって考えてやってみればもっと健やかな自分になれる」（Mary Reilly, 1962）のである。

しかし、学生が実習で出会う社会の中の作業療法士の多くが、対象者特有の作業に関心を寄せることなく、画一的な疾患依存的な「リハビリ」指導をしており、学生も批判的視点をもつことなく、従順に学んでいる。作業レンズ使う作業療法士が増えているようにも見えるが、全体の作業療法士数も増え続けており、リハビリテーション医学など関連領域では障害者の身体的正常化を目指す風潮が強化されているようにさえ感じる。

長期目標に掲げた学生の自律的判断と行動を求めるためには、私が考える真の作業療法を教えるよりも、学生自身が自分や他者の視点に気づき、多様な視点の存在を知り、自らを対象化して広い視野で物事を捉えることができるような教育が必要だと考えるようになった。そこで、プレイバックシアターが有効な教育手法になりうるのではないかという思いが生ま

れている（添付資料 2）。自律的判断と行動の基盤となるのは、多様な価値観を認め、自らの考えを主張するオープンな姿勢である。オープンに意見を出し合い、ディスカッションすることができれば、創造的なアイデアが生まれる。失敗を恐れず、失敗を受け入れる環境においては、他者に追随することなく、自ら考えた行動をとりやすくなるのではないか。学生だけでなく、教員でさえ、組織の階層に従い、見えない権力に遠慮して行動を自己規制している様子が伺えることから、学生教育に留まらず、大学環境さらに地域環境において、プレイバックシアターを実践する価値があるのではないかと考えるようになった。

そこで、これからはオープンな態度、自律的判断と行動を育てる教育を中心に考えていくことにする。

3. 教育の責任

1) 作業療法学科カリキュラムにおける担当科目の位置づけ

作業療法学科カリキュラムにおいて、全学年に渡り、基礎から専門までの科目を担当している（添付資料 3）。下線の実線は担当科目、点線は部分担当の科目、○は単独担当の科目である。担当外科目の一部のみ掲載している。

	1年	2年	3年	4年
全学共通科目		<u>キャリアビジョン</u>		
人間と社会生活の理解に関する科目	人間発達学 人間工学 <u>人権論</u>	<u>生命倫理学</u>	中枢神経機能学	
保健医療福祉を発展させる科目	リハ概論 <u>チーム医療福祉論</u>	地域リハ論		<u>チーム医療福祉演習</u>
専門領域理解の基礎となる科目	解剖学 生理学 臨床心理学	運動学 内科学 精神医学	リハ医学 終末期医療	
作業療法学の科目	○ <u>作業療法概論</u> ○ <u>作業科学</u> 基礎臨床実習	○ <u>作業療法評価学</u> 遂行分析学 身体障害治療学 精神障害治療学	○ <u>作業療法研究法</u> ○ <u>作業療法理論</u> 地域作業療法学 福祉機器論 <u>地域臨床実習</u>	<u>クリニカルリ ーズニング</u> <u>総合臨床実習</u> <u>特別臨床実習</u>

2)担当授業一覧 (添付資料 3)

年度	担当科目	時間	学科, 学年 (必修・選択)	受講者数
本学				
2017-	作業療法概論	30	作業療法, 1年 (必)	30名
2000-	作業科学	15	作業療法, 1年 (必)	30名
2016-	作業療法倫理学	15	作業療法, 2年 (必)	30名
1996-	作業療法評価学	15	作業療法, 2年 (必)	30名
2000-	作業療法研究法	15	作業療法, 3年 (必)	29名
2015-	作業療法理論	15	作業療法, 3年 (選)	30名
2000-	クリニカルリーズニング	15	作業療法, 4年 (選)	29名
1997-	卒業研究	30	作業療法, 4年 (必)	2~3名
2015-	人権論	6/30	全学科, 1,2年 (選)	約10名
2008-	生命倫理学	30	看護・作業, 2年 (必)	96名
2004-	チーム医療福祉論	30	5学科1年 (必)	200名
1998-	チーム医療福祉演習	30	5学科4年 (必)	約200名
2008-	キャリアビジョン	2	5学科2年 (選)	約50名
2014-	助産学研究法	4	助産学専攻 (必)	10名
2005-	作業科学特論・演習	90	修士	2名
2014-	医療福祉倫理学特論	15/30	修士 (選)	2~8名
2015-	コミュニケーション特論	30	修士 (選)	1~4
2005-	作業遂行障害学特別研究 (修士論文指導)	—	修士	1~3名
広島大学				
2014-	作業療法理論	2	作業療法, 2年 (必)	約30名

3)担当授業の概要：なぜ、どのように教えているか

①作業療法専門科目：自律的に判断するために必要な知識を提供するために、わかりやすいテキストの使うことにしている。適切なテキストがない場合は執筆する (添付資料 4)。決められた通りに行動するのではなく、状況を読み取ったり、自身の内面から生じた感情を表現したり、意見を表出する機会を作るようにしている。具体的には、授業を対話型で行ったり、グループディスカッションをしたり、プレイバックシアターのエクササイズを取り入れている。作業科学、作業療法評価学、作業療法研究法においては、学生各自の独自の学習プロセスを示すラーニングポートフォリオ作成を促し、それを持参しての面接試験を実施している。成績評価は、授業参加、レポート、面接試験に配点を行い合計する。

- **作業療法概論**：担当教員の退官後、2017年から担当。鎌倉矩子「作業療法の世界」をテキストに、グループディスカッション、歴史の一場面の劇などを取り入れた。中間と期末に紙筆試験を行い、自己採点させた。
- **作業療法倫理学**：担当教員の退官後、2016年から担当。国際的に読まれているテキストである Willard & Spackman の作業療法の該当章、世界作業療法士連盟の声明書を資料

として、倫理的問題を含む事例についてディスカッションし、学生はエッセイを書く。

- **作業科学**：2008年出版の自著「作業って何だろう」をテキストとした。2015年から改訂版の執筆部分を教材とした。2017年前期には、学生各自が1か月間行いたい作業に取り組む課題を行った。来年度から「作業って何だろう第2版」を使用予定。
- **作業療法評価学**：COPMを使った面接評価を行う。自著「COPM, AMPS スターティングガイド」(2008年)、「COPM, AMPS 実践ガイド」(2014年)を教科書とする。遂行観察については、AMPSに関連する「遂行分析学」を担当する教員と時期を調整して行う。
- **作業療法研究法**：エビデンスに基づいた実践を行う能力を修得することを目的に、研究法を教授する。学生は、自分で決めた作業療法研究のテーマに沿って、論文を検索し、抄録を作成し、批判的吟味を加える。文献レビューと研究計画書を書く。学生の主体的な学習を促すために、授業は学生の抄録や文献レビューの発表と質問、教員によるコメントと回答で構成している。
- **作業療法理論**：作業療法事例を使ったり、国際的教科書の章の翻訳を配布したりしたが、学生の記憶定着は乏しかった。今年は、プレイバックシアターの手法を使って、理論を視覚化し、作業療法事例を説明することとした。

②実習関連科目：行動の省察による学習を目的に、学生の発表、グループワーク、プレイバックシアターを行う。

- **クリニカルリーズニング**：作業療法士の行動の背後に、どのような理由があるかを学ぶために、作業療法場面のシナリオを分析したり、学生が経験した実習場面での行動を振り返る。臨床実習前後の集中講義で、プレイバックシアター、実習場面の記載の分析を行う。
- **実習セミナー**：地域臨床実習、総合臨床実習における学生の経験をクラスで共有するために、実習終了後にセミナーを行う。学生が担当した事例報告、プレイバックシアターを行う（添付資料5）。

③研究指導：学生が選んだテーマで、研究プロセスを主体的に経験できるよう支援している。原則週1回の面談を行う。できるだけ、学外での発表機会を設けることとする。

- **卒業研究**：担当学生が卒業論文を作成するための支援を行う。作業療法研究法の授業終了後（3年後期）から翌年11月中旬まで、担当学生と毎週1コマ程度話し、テーマ選定、論文検索と抄読、研究計画、データ収集、論文執筆、発表準備を行う（添付資料6）。
- **作業科学特論・演習、作業遂行障害学特別研究**：修士論文作成のために、関連文献を読み、研究法を学ぶ。修士論文完成を支援する（添付資料7）。

④他学科合同授業：一方的な講義にならないよう、事例を考える演習や近隣に座っている学生同士のディスカッションの時間を設ける。出欠管理を確実にするために、学生は個人記録用紙に毎時間の授業コメントを記入し、グループごとに出欠と遅刻・早退を記録するグループ記録用紙に記入する。

- **人権論**：人間福祉学科教員4名とのオムニバス。リハビリテーションの歴史、作業的公

正をキーワードに講義を行う。

- **生命倫理学**：医療福祉領域における倫理的問題を理解するために、倫理原則や倫理理論など基本的倫理概念を学ぶ。倫理概念を使って、臓器移植や生殖操作などの現代社会の倫理的問題を分析する。
- **チーム医療福祉論**：保健福祉学部 5 学科（看護，理学療法，作業療法，コミュニケーション障害，人間福祉）の 1 年生が，各学科が養成する専門職の役割と機能を学ぶ。概論，各専門職教員 5 名の担当時間の調整，学生のグループ発表，試筆試験の作成と採点を担当している。各専門職教員には，複数職種の協働を理解できる事例を含む授業内容となるよう依頼している。
- **チーム医療福祉演習**：保健福祉学部 5 学科の 4 年生が，学外実習を含むこれまでの学習から得た知識を使って，小グループ（18）で事例検討を行い，発表する。グループ担当教員を招集して事前会議を行うなどの授業運営を行う。
- **キャリアビジョン**：科目担当教員の依頼により，2007～2009 年度文科省現代 GP「ヘルスサポーターマインド育成支援」プログラムの概要を，他教員 1 名と共に講義している。倫理事例を用いたディスカッションを取り入れることで，コミュニケーション力，倫理思考力，ニーズに気づき行動する力の具体的なイメージを得ることを期待している。

⑤その他：受講生の専門領域に合わせた教材を準備している。

- **助産学研究法**：学生の記憶に残るように，質的データを実際に扱う。昨年度は「なぜ助産師を目指したか」今年度は「学外実習で何を学んだか」をテーマに，学生相互にインタビューを行い，データ化し，テーマを抽出し，文章化するプロセスを示した。
- **医療福祉倫理学特論**：前半は，他教員が生命についての基本概念が教授されており，私が担当する後半は，プレイバックシアターを取り入れた。昨年度，今年度は医療専門職の学生が 7～8 名参加し，深いストーリーを共有することができた（添付資料 5）。
- **コミュニケーション特論**：担当教員の退官後，他教員と二人で担当。英語による学術的プレゼンテーションの準備をして発表する。アメリカ人による特別授業を 6 コマ行う。

4) 作業療法士への教育活動：なぜしているか，どのように理念と関連しているか

作業療法実践の質の向上のために，作業療法士の勉強会に参加したり，研修会や学会の講師を行う（添付資料 8）。都道府県士会からの依頼，卒業生を通じた依頼は極力引き受けることにしている。そうすることで，作業レンズで見ることで，クライアント中心，作業中心の作業療法を推進しようとしている依頼者を応援できると考えるからである。

病院などで臨床実習中の学生を訪問した際に，可能であれば勉強会の講師をしている。昨年からはプレイバックシアターを売り込んでいるが，時間的制約もあり，実現は昨年度 1 回に留まっている。

5) 研究会活動：なぜしているか，どのように理念と関連しているか（添付資料 9）

作業療法の発展，作業療法実践の質の向上のために，研究会に所属し，役員をしている。日本作業療法教育研究会では，理事・事務局長（2001～2007 年），理事（2009～2014 年，2011～2014 年，会長）を務めた。世界作業療法連盟の声明書の翻訳を作成し，ウェブサイト

からダウンロードできるようにしたり (<http://www.joted.com/>), 国際的に最も普及している作業療法のテキストである Willard and Spackman's Occupational Therapy の最新版 (第 12 版, 73 章) を読むプロジェクトを主導し, 53 名が参加している。日本 AMPS 研究会 (2017 年度より CIOTS Japan と作業遂行研究会に改組) では, 2000 年の発足時から副代表をしており, 国際 AMPS シンポジウム (2004 年, アデレード), 国際 OTIPM シンポジウム (2013, 2015 年にソウル, 2014, 2017 年に東京) に参加した (<http://amps.xxxxxxxx.jp/>)。AMPS 講習会と ESI 講習会の企画, 運営に関わっている。2013 年に設立した作業遂行研究会の会長を務めている。作業遂行研究会は, CO-OP (Cognitive Orientation for daily Occupational Performance) というアプローチ法の研修会開催のために発足させた。CO-OP は, 日常生活の遂行の問題をクライアントと共に, 目標を決めプランを立て試みて評価していくという手法である。作業遂行研究会は, 日本 AMPS 研究会の改組に伴い, AMPS 関連の活動を引き継ぐこととなった。日本作業科学研究会では 2006 年発足から理事・副会長 (2006~2011 年) を務め, ニュースレターを作成し, 日本における作業科学の基盤を作ろうと努力した。2013 年から理事 (2014 年まで機関誌担当), 2015 年から会長を務めている。

情報入手のために, 主な作業療法学会 (日本作業療法士協会, 米国作業療法協会, 世界作業療法士連盟) に所属している。

情報入手と, 作業療法の普及のために作業療法関連領域の学会 (日本公衆衛生学会, 日本生命倫理学会, 日本保健医療社会学会, 日本医療福祉連携学会) に所属している。

6) 社会に向けた教育活動

プレイバックシアター劇団しましまを 2014 年に創設, 代表を務めている (添付資料 2)。年に 1 回定期公演を行い, 2016 年から三原シティーカレッジを開催している。2016 年には公開講座も行った。地域課題研究の一環として 2015, 2016 年に庄原市総領自治振興区で公演した。2016 年 9 月に総領小学校と総領中学校で道徳教育の一環として公演を行い, 中国新聞, 三原テレビで紹介された。2017 年 11 月 3~5 日に, 三原キャンパスでアジア太平洋プレイバックシアター大会 2017 を開催するための準備を行っている。11 か国から約 160 名が参加予定である (<https://apptc2017.jimdo.com/>)。

ものづくりサークル「作ら (さくら)」の活動に参加し (2012 年~), 年齢や障害の有無にかかわらず興味のあるものづくり活動に参加できる機会を作っている。参加者が様々なものづくり作業を通して, 身体的, 精神的, 社会的に良好な状態を維持し, 作業が行える地域社会の創造を目指している。特定 NPO 法人ちゃんくすの理事 (2009~2014 年), ちゃんくすで行われている手芸クラブ「ちえこの手仕事クラブ」に参加し, 多様な作業ができる地域づくりに貢献しようと考えている。

本学教員有志による倫理研究会 (1997 年~) で代表を務めている。倫理研究会は, 年 1 回セミナーを開催し, 学内外から参加者を得ている。

4. 教育の方法

1) プレイバックシアター

プレイバックシアターは, コンダクターと呼ばれる司会者が観客の一人をテラーとして舞台に招き, テラーが経験したストーリーをインタビューする。その後舞台にいる 3~4 名のア

クターがテラーのストーリーを即興で演じる。舞台にいるミュージシャンが楽器を演奏して芝居の質を高める。スクール・オブ・プレイバックシアター・ジャパンの講師，劇団プレイバックズの協力を得て，授業，実習セミナー，倫理セミナーでプレイバックシアターを取り入れている（添付資料 5）。

2) 作業レンズと COPM

作業科学で作業レンズを，作業療法評価学で COPM を教えている。作業療法概論では，作業療法の歴史が，作業への着目から始まり，医療やリハビリテーションの一部として機能回復に焦点が移った時代もあったが，数々の作業療法理論が作業への焦点化を再認させたことを説明している。

作業レンズの普及を期待して講演を引き受けている。作業レンズを使う具体例として作業療法評価法である COPM を紹介している。講演タイトルを「作業の意味をどう考えるか」（近畿作業療法学会），「人を育て社会を創る作業を探そう」（東海北陸作業療法学会）などとし，誰がどこで何をするか，それがどのような意味をもつかを考える（作業レンズで見る）ことを促している

COPM の実施法については，精神科作業療法協会のウェブサイトで情報を発信したり（<http://www.npota.com/>），ビデオを公開している（<https://www.youtube.com/watch?v=TCQyUugfLmI>）。

3) AMPS, ESI, OTIPM

AMPS は，適度に困難な馴染みのある日常作業を，楽に効率よく安全に自立してできるか（身体的努力を要して効率性が低く危険で援助が必要か）を観察して，運動技能とプロセス技能を得点化する評価法である。AMPS 評価者になるためには，5 日間の講習会に参加して，評価者換算コードを獲得する必要がある。

ESI（Evaluation of Social Interaction）は，相手と話したり，一緒に何かを作ったりする場面を観察し，相手を尊重し丁寧でタイミングよく成熟した社会交流ができるかどうかを評価する方法である。ESI 評価者になるためには，3 日間の講習会に参加して評価者換算コードを取得する必要がある。

OTIPM（Occupational Therapy Intervention Process Model）は，クライアント中心のトップダウンの作業を基盤とした作業療法を行うための流れを示したもので，作業療法学科教員 5 名で OTIPM を使って授業を行うこととした。たとえば，OTIPM の最初の段階であるクライアント中心の作業遂行文脈の確立では COPM の情報を使い，遂行観察では AMPS など日常活動の観察記録を使う。遂行の問題を引き起こす原因の解釈では疾患や症状など医学的知識を使う。介入モデルの選択では，代償モデルを選択した場合に福祉機器を使い，回復モデルを選択した場合には各種治療理論を使う。OTIPM という同じ枠組みで作業療法専門教育を行うことで，学生は対象者の年齢や疾患が異なっても作業療法のリーズニングを学修することができるのではないかと考えている。

5. 教育の成果（添付資料 10）

1) プレイバックシアター

2012年以降、積極的にプレイバックシアターを使った教育を行っている（添付資料 2,5）。

劇団しましまは、2014年の設立時には、作業療法学科教員4名、人間福祉学科教員1名、近隣病院勤務の作業療法士1名だったが、看護学科教員1名、コミュニケーション障害学科教員1名が加わった。2015年にモントリオールで開催された世界プレイバックシアター大会では、作業療法士教育での実践を報告した（添付資料 5）。

2017年度大学重点事業「国際イベントに伴う国際化推進事業」として、11月に本学で開催されるアジア太平洋プレイバックシアター大会に向けて、学生を対象に通訳養成ワークショップを開催している。ワークショップには、三原キャンパスの3学科から、広島キャンパスの国際文化学科からも学生が参加している。

2) 作業レンズとCOPM

医療やリハビリテーションの分野では、疾患や心身機能障害から現象を捉える見方が充満しているので、作業に着目する、つまり作業レンズで見ることは容易ではない。作業レンズで見る目を養うために文章を書いたり、講演依頼を引き受けたりしている。授業「作業科学」で使用している教科書の改訂版『『作業』って何だろう第2版』（医歯薬出版、2017年）を出版した（添付資料 4）。

3) AMPS, ESI, OTIPM

作業療法評価法であるCOPMとAMPSを中心とした作業療法を推進するための書籍2冊に加え、作業療法の流れを示すOTIPMの書籍を作業療法学科教員5名と他の作業療法士の協力を得て翻訳し授業で使っている（添付資料 4）。学科教員と共にOTIPM講習会の準備をしている。

4) 卒業論文と修士論文（添付資料 6, 7）

多くの学生は、卒論発表会での報告と卒業論文集への執筆で終了するが、学会発表や学術誌への投稿を希望する場合には支援している。学会発表3件（4名）、論文掲載2件ある。

修士論文を執筆した学生は12名で、論文投稿を促している。日本作業療法士協会による学術誌「作業療法」へは7名が、日本作業療法教育研究会の学術誌「作業療法教育研究」には1名が掲載された。2013年に修了した学生の投稿論文が、2017年に日本作業療法士協会から奨励賞を授与された。

6. 改善: 変化プロセス

1) ポートフォリオ作成を通しての教育方法の変化: プレイバックシアターの積極的導入

2014年9月の本学での第1回ワークショップでティーチング・ポートフォリオを作成し、同年12月に更新し、大阪府立大学高専でのワークショップでアカデミック・ポートフォリオを作成した。当初は主体的学習の推進を教育理念としていたが、アカデミック・ポートフォリオ作成時点で、自律性の育成に関心が移行した。学生の自律性を育むことは、生命倫理学の授業においても課題であったが、プレイバックシアターの研鑽を積む中で、知識ではない態度や行動の変化を期待する教育手法として、数々のプレイバックシアターの手法が有効ではないかと考えるようになった。

プレイバックシアターの研修を受けることで、教育方法として徐々に有効に使えるようになった。

2) 作業療法士教育から社会における作業レンズの普及へ

まずは作業療法学生に、続いて作業療法士に、**doing** に焦点を当てて物事を見て考える作業レンズの普及を試みていた。COPM と AMPS の活用法を記した書籍を出版したり、AMPS や OTIPM 講習会を開催したりしたが、実際に有効活用しているという声を聞くことは少ない。作業療法学生も作業療法士も社会の多くの人々の見方や行動に大きく影響されており、作業レンズで見ることは知っているが、実際に使うことは困難なのだ。一方、作業療法士以外の人が作業に関心を示すこともあった (okadamakoto のブログ)。プレイバックシアターの研修や同窓会の健康教室などで、作業レンズについて話すと強い共感を示す人に出会った。現在の日本社会では、心身機能障害の有無、性別、家柄、出身地などによりステレオタイプに人を見ることが多い。こうした社会一般の態度を変えるためにできることを行いたいと考えられるようになった。作業、つまり自分が行うことにより、自分や環境に変化を起こすことができれば、よりよい職場や地域へと改善していけるかもしれない。そこで、作業療法学生や作業療法士以外の人を対象とした教育活動にも、積極的に参加していきたいと考えられるようになった。

プレイバックシアターのストーリーでは、テラーは自分が行ったこと (作業) を語る。テラーが語るのは作業の主観的意味であり、その場にいるアクターや観客はテラーの主観的世界を理解することができる。多くの場合深い共感が生まれ、自分の経験 (行ってきたこと、作業) を振り返ることになる。これは、作業に焦点を当てて物事見ることにつながり、作業レンズの普及になるのではないかと考えている。

3) 作業療法の発展への貢献

COPM と AMPS を使うことにより、真の作業療法を推進できると考えていたが、それだけでは不足である。わかりやすい、記憶に残る形で、真の作業療法とは何かを伝える努力が必要である。日本作業療法士協会は、生活行為向上マネジメント (MTDLP: Management Tools for Daily Living Performance) を推進している。MTDLP は、クライアントの生活行為を特定してサービスを提供するという点で、心身機能の正常化を目指すリハビリテーションよりも作業レンズに近いといえる。そこで、MTDLP の理論背景がなくエビデンスが弱いというマイナス部分ではなく、作業レンズに近づくというプラス面を強調することにした。都道府県士会などの作業療法士の団体からの依頼を可能な限り引き受け、記憶に残る講演を心がけている。

7. 目標

1) 短期目標

① プレイバックシアター指導者としての研鑽と活用

自律的に判断し行動する力の育成と作業レンズの普及のために、プレイバックシアターが有用な手法だと考えているので、プレイバックシアター指導力を高めるための研鑽を行い、学生教育や地域貢献において活用していきたい。プレイバックシアターの研修

では、2018年1月にグループプロセス、2月にサイコドラマ、4月に指導者養成に参加する予定である。2017年11月3～5日のアジア太平洋プレイバックシアター大会では、主催者、劇団しましまの公演、6,7日のポストワークショップ参加者として、多様な分野で行われている多様な手法を学びたい。活用においては、昨年につき総領町での小中学校での公演（12月7日）、精神科作業療法士からの提案によるワークショップ（11月14日）、県立広島病院コメディカル研修としてのワークショップ（11月か12月）を行う予定である。

②教員集団としてのポートフォリオ作成

本学では2013年に栗田佳代子氏による講演とミニワークショップに始まり、毎年ティーチング・ポートフォリオワークショップを開催している。今後も継続し、より多くの教員が作成・更新ワークショップに参加するよう取り組んでいきたい。他キャンパスの教員と協力して、2018年度は庄原キャンパスでティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催したい。

③退職までの計画立案

65歳の定年退職まで仕事をするならば、教員生活は後8年間である。これまでの資料等を整理し、今後必要な物を選別し、残された教員としての活動で何を行うか計画を立てたい。作業療法士になってから受講した研修会資料、コピーした文献などが未整理のまま研究室に積み上げられているので、思い切った断捨離を行う。

2)長期目標

作業療法学生および作業療法士だけではなく、多くの人々に対して、自律的に判断し行動する力の育成と作業レンズの普及を目指して活動していきたい。一人でも多くの人が、権力や不合理な圧力にコントロールされることなく、自らが正しいと判断した道を進み、自分の人生を切り拓き、自分自身のよりよい未来と、よりよい社会の創造にエネルギーを傾けるようになるための活動を行っていきたい。

8. おわりに

2014年9月のティーチング・ポートフォリオ作成では、作業療法士としての歴史を振り返り、同年12月の更新とアカデミック・ポートフォリオ作成により、教育理念が明確となった。長期目標に掲げた「自律的判断と行動の育成、作業レンズの普及」を心に留め、教育と社会貢献に努めたい。研究テーマとしては、倫理教育、COPMとAMPSの活用、プレイバックシアターの効果が考えられる。

ポートフォリオ作成は、自分自身をしっかりと見つめることにつながり、将来の方向を見定めることができる。今後も更新し続け、同僚に対してポートフォリオ作成の意義を主張していきたい。